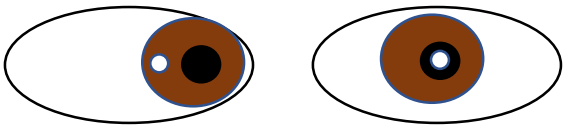
「若年者の後天性内斜視とデジタルデバイスの関連に関する多施設共同研究」のお知らせ

（一般の方へ）

最近、若い人たちに内斜視の発症が増加しているという報告がでています。その原因として、スマートフォンなどのデジタルデバイスを過剰に使っている可能性が考えられています。



図：右眼の内斜視

ある日突然斜視になると、物が二つに見えて困りますが、最初は時々二つに見えるだけだったのが、徐々にいつも二つに見えるようになる人や、そのうち慣れてしまって二つに見えるのが気にならなくなる人もいます。外見的にわかるほど斜視が強い人もいますが、ものが二つに見えても、だれにも相談できずに一人で悩んでいる子供さんもおられます。

これから学校の授業でもスマートフォンやタブレット端末を使用することが増えるため、スマートフォンの安全な使いかたを知ることと、斜視になりやすい特性を持った人を知ることが必要です。

日本弱視斜視学会、日本小児眼科学会、国立成育医療研究センターでは若い人たちの内斜視とデジタルデバイスの関連について全国の専門施設の協力をえて調査を行うことにしました。

１）**対象となる方**：5 歳から 35 歳の方で、最近 1 年以内に、内斜視（目が内側に寄りすぎる）になって両目で見ようとすると物が二つに見えてしまう方。スマートフォンなどのデジタルデバイスを使っているかどうかは関係ありません。

２）**対象にならない方**：事故やケガなど明らかな原因があったり、麻痺性斜視のために二つに見えるようになったりした方。すぐに、ボツリヌス毒素注射や斜視手術を希望する方。

３）**調査の内容**：スマートフォンなどのデジタルデバイスの使用時間や、使用方法について詳細にお伺いします。また、受診から 3 か月間はデジタルデバイスを使っている時間を記録していただきます。3 か月間は、ボツリヌス毒素注射や斜視手術をせずに斜視の程度がどうなったかを調べます。

４）**調査の期間**：200 人の患者さんが登録されるまでです。

この調査は、浜松医科大学を代表とし、国立成育医療研究センターおよび研究参加施設の倫理委員会の承認を得て行っております。個人情報は厳密に守られたうえで行われます。詳細はお近くの施設へお問い合わせください。

（倫理委員会については現在申請中の施設もあります。順次変更してまいりますが最新の情報は各施設にお問い合わせください）

2019 年 11 月 21 日

「若年者の後天性内斜視とデジタルデバイスの関連に関する研究」代表者
日本弱視斜視学会理事長・浜松医科大学眼科病院教授
佐藤美保